

決して奪い去られない恵み

ヨハネの福音書 10章 22-30節

はじめに

今日は「ペンテコステ」です。イエス様の復活を記念する「イースター」から数えて五十日目となります。「ペンテコステ」は、「聖霊降臨日」とも呼ばれ、父なる神様とイエス様から「聖霊」がこの地上に遣わされたことを記念する日です。

イエス様がこの地上に遣わされたのを記念するのが「クリスマス」で、聖霊がこの地上に遣わされたのを記念するのが「ペンテコステ」と言えます。

キリスト教の信仰は、生けるまことの神様を「三位一体の神」とであると信じています。生けるまことの神様は、ただひとりしかいませんが、父と子と聖霊の三つの位格を持っておられます。つまり父なる神様も神であり、イエス様も神であり、聖霊も神であるけれども、神様は三人いるのではなく、ただひとりしかおられないということです。これが、私たちが「主」と呼ぶ、「三位一体」の生けるまことの神様です。

さて、第五週がある時の説教は、キリスト教の基本的な教理を説教することになっています。今日は、私たちは生涯の最後まで信仰を守り通すことができるのか、ということを考えていると思います。

私は14歳の時に、自分の口で信仰を告白しましたが、その時に不安だったのが、自分の信仰は本物かどうか、自分の信仰は一時的なものではないか、自分はずっと信仰を持ち続けられるかどうか、もっとちゃんと信じてから信仰を告白したほうがよいのではないか、ということでした。私は、自分の信仰に自信がなかったのです。

皆さんはどうでしょうか。皆さんは生涯の最後まで信仰を守り通すことができると信じているのでしょうか。別の言い方をすると、皆さんは救われる確信を持っているのでしょうか。

1. イエスがキリストであると信じるには？

今日の聖書箇所、ユダヤ人たちはイエス様を取り囲んでこう言いました。「**あなたは、いつまで私たちに気をもませるのですか。あなたがキリストなら、はっきりと言ってください**」。ユダヤ人たちは、イエス様が「キリスト」であるかどうか、つまり「神の子」であり「救い主」であるかどうかを知りたかったのです。

イエス様が「キリスト」であるかどうか、「神の子」「救い主」であるかどうかは、キリスト教の根本的な信仰に関わる問です。神様は私たちに、御自身がこの地上に遣わされたイエス様を「キリスト」であり、「神の子」「救い主」であると信じる人を救われるからです。

ではどうしたら、イエス様を「キリスト」「神の子」「救い主」と信じることができるので

しょうか。イエス様は、ユダヤ人たちにこう言われました。「**わたしは話したのに、あなたがたは信じません。わたしが父の名によって行うわざが、わたしについて証しているのに、あなたがたは信じません**」。イエス様は、御自身の「ことば」と「行うわざ」によって、御自分が「キリスト」であり、「神の子」「救い主」とであると証していると言うのです。ですからもし私たちが、イエス様を信じたいと願うなら、イエス様の「御言葉」と「御業」に注目しなければなりません。イエス様の「御言葉」と「御業」は、「聖書」に書かれています。イエス様が「キリスト」であり、「神の子」「救い主」とであるという確信を持つためには、私たちは「聖書」を読まなければなりません。「聖書」こそ、私たちに信仰と確信を与えてくれるものなのです。

2. イエスの羊とは？

しかし、聖書を読めばすべての人が、イエス様を「キリスト」であり、「神の子」「救い主」とであると信じるわけではありません。イエス様は、「**わたしの羊**」、つまり「イエス様の羊」だけが、聖書を通してイエス様を信じることができると言うのです。今日の聖書箇所に出てくるユダヤ人たちは、イエス様の「ことば」を聞いて、イエス様の「行うわざ」を見ても、イエス様を信じられなかったのです。それは、彼らが「イエス様の羊」ではないからだといエス様は言われるのです。

では、「イエス様の羊」とはどんな人でしょうか。イエス様は、このように言われます。「**わたしの羊たちはわたしの声を聞き分けます。わたしもその羊たちを知っており、彼らはわたしについて来ます**」。「イエス様の羊」とは、イエス様のことばをしっかりと聞き、イエス様に従う人のことです。イエス様に「ついて行く」とは、イエス様に「従う」ということであり、イエス様の「弟子となる」ということを意味しています。「イエス様の羊」とは、イエス様の「ことば」に聞き従い、イエス様の「弟子」となって、イエス様の「足跡」に従って歩いていく人のことです。「イエス様の羊」だけが、聖書に書かれているイエス様の「言葉」と「御業」を通して、イエス様を信じることができ、イエス様に従い、イエス様の「弟子」となることができるのです。

イエス様は 29 節で、「イエス様の羊」について、「**わたしの父がわたしに与えてくださった者**」と言っています。また 27 節では「**わたしもその羊たちを知って**」いると言われています。「イエス様の羊」とは、父なる神様によって選ばれ、イエス様の手に乗ねられた人たちです。イエス様は、父なる神様によって委ねられた人たちを、ひとりひとり知っておられます。そしてイエス様は、「**わたしは羊たちのために自分のいのちを捨てます**」(ヨハネ 10:15)と言われるように、父なる神様によって選ばれ、委ねられた人たちの罪を償うために、十字架で命を捨てられたのです。

私たちが今、イエス様を信じていることができているのは、父なる神様によって選ばれ、イエス様によって知られている「イエス様の羊」だからであり、イエス様が私たちのために十字架で罪を償ってくださったからです。父なる神様によって選ばれ、イエス様によって知られ、

イエス様に罪を償っていただいたからこそ、私たちもイエス様を選び、イエス様を知り、イエス様に従うことができるようになったのです。

私たちの信仰は、父なる神様の選びとイエス様の十字架によって支えられているのです。

3. 永遠のいのちとは？

イエス様は 28 節で、「わたしは彼らに**永遠のいのちを与えます**」と言われます。父なる神様によって選ばれ、イエス様の十字架によって罪を償われ、イエス様を信じ従う人は、「永遠のいのち」を与えられます。

「永遠のいのち」とは何でしょうか。「永遠のいのち」とは、肉体の死を経験しないということではありません。「永遠のいのち」とは、この世のいのちの延長ではなく、全く「新しいいのち」です。イエス様は、ヨハネ 17：3 でこのように言っています。「**永遠のいのちとは、唯一まことの神であるあなたと、あなたが遣わされたイエス・キリストを知ることです**」。イエス様は、「永遠のいのち」とは、父なる神様とイエス様を「知ること」だと言われます。

ここでの「知る」というのは、頭で理解するとか知的に知るということではありません。聖書では、男が女を知るといふ表現が出てきます。それは、「愛の交わり」を意味します。ですから、「永遠のいのち」とは、父なる神様とイエス様と永遠に「愛の交わり」を持つことと言えます。私たちが、父なる神様とイエス様と永遠に、愛し、愛される交わりの中に入れられることを意味します。それは決して、肉体の死によって終わってしまう交わりではありません。肉体の死を経験した後も、永遠に続く交わりです。

私たちは、イエス様を信じて新しく生まれました。その時から私たちは、「新しいいのち」である「永遠のいのち」に生かされているのです。「永遠のいのち」は、私たちが肉体の死を経験してから与えられるものではありません。イエス様を信じた時から私たちは、「永遠のいのち」に生かされているのです。父なる神様とイエス様と私たちとの交わりは、イエス様を信じた時から永遠に続くものなのです。

皆さんは、この「永遠のいのち」を大切に生きているでしょうか。「永遠のいのち」を大切に生きるとは、神様との交わりを喜び、大切に生きるということです。毎日のデボーションを通して、また毎週の礼拝を通して、神様との交わりを喜んで生きることこそ、「永遠のいのち」を豊かに生きるということではないでしょうか。

4. 救いの確信を得るには？

イエス様は 28-30 節で、このように言われます。「**彼らは永遠に、決して滅びることがなく、また、だれも彼らをわたしの手から奪い去りません。わたしの父がわたしに与えてくださった者は、すべてにまさって大切です。だれも彼らを、父の手から奪い去ることはできません。わたしと父とは一つです**」。

父なる神様によって選ばれ、イエス様の十字架によって罪を償われ、イエス様を信じ従う人を、父なる神様とイエス様は、その御手によって永遠に守ってくださるということです。私

私たちは、イエス様を信じて「永遠のいのち」を与えられています。父なる神様とイエス様は、「永遠のいのち」を与えられた私たちを永遠に守ってくださるのです。私たちは決して滅びることはないのです。決して神様とイエス様との交わりを奪い去られることはないのです。

私は 14 歳の時に、自分の信仰に自信がなく、自分の口で信仰を告白するのを躊躇していました。しかし私は、聖書の御言葉を読むうちに、自分の信仰の一つの間違いに気づいたのです。私が自分の信仰に自信がなかったのは、自分を信じようとしていたからでした。自分の信仰が強くなったら、自分の信仰に自信がついたらと、自分の信仰ばかり見ていて、神様やイエス様を見ていなかったのです。神様やイエス様が、「わたしがあなたを永遠に守る」「あなたは決して滅びない」と約束してくださっているのに、その約束を信じないで、自分の信仰ばかり見ていたのです。結局私は、神様を信じないで、自分を信じようとしていたのです。自分の信仰が信じられるようになったら、自分の口で信仰を告白しようとしていたのです。しかし自分の信仰ばかり見て、自分を信じようとしていたら、いつまで経っても信仰の決心などできないし、救いの確信も持つことはできません。私たちは、自分を信じるのではなく、神様の約束を信じなければなりません。自分を信じるのではなく、神様を信じなければなりません。信仰とは、自分を信じることを止め、神様を信じ、神様に委ねることです。私たちは弱く、不安定な存在です。私たちの信仰は浮き沈みがあり、当てになりません。私たちは自分の拠り所を、父なる神様の選びに、イエス様の十字架に、そして神様の約束に置かなければなりません。それこそ私たちの揺るぎない土台なのです。

おわりに

父なる神様は私たちを選び、イエス様は私たちの罪を償うために十字架で死なれ、聖霊は私たちのうちに住んで、信仰を与え、御言葉を通して私たちをイエス様の似姿へと変え、私たちが御言葉に従う力を与えてくださいます。私たちの信仰は、三位一体の神様によって守られ、支えられています。

私たちは、自分を信じるのではなく、神様を信じ、神様の約束を信じていかなければなりません。それこそ、私たちに揺るぎない確信を与えてくれる生き方です。

天におられる父なる神様。

あなたは恵みによって私たちを選び、イエス様の御手に委ね、「イエス様の羊」としてくださいました。そしてイエス様の十字架の死によって私たちの罪の償いをされ、「永遠のいのち」を私たちに与えてくださいました。私たちの信仰は、弱く不安定なものです。しかしあなたの約束は確かで、力強いものです。どうか私たちが、自分を信じるのではなく、「彼らは永遠に、決して滅びることがなく、また、だれも彼らをわたしの手から奪い去りはしません」と言われるあなたの約束を信じることができるよう。あなたの約束に、自分自身を委ねていくことができますように。この祈りを私たちの救い主イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン。